

化学・生物総合管理の再教育講座(講義内容)

前期

科目No.	501	科目名	科学コミュニケーション学概論	サブネーム	科学コミュニケーションの理念と実践		
連携機関名		レベル	基礎	講義枠	土曜日	講義時間	10:00~11:30, 11:50~13:20
科目概要	21世紀を迎え、科学と社会との関係は大きく変わりつつある。先端医療や食の安全性、地球環境問題などに顕著のように、科学技術が市民生活に与える影響はますます大きくなりつつある。また、科学技術をめぐる問題への取り組みは、これまでは科学者や行政の手に委ねられていたが、近年では、そのプロセスへの市民の関与が重視されるようになってきた。本科目では、そのような動向について、「科学コミュニケーション」という観点から検討する。なお、科学コミュニケーションでは「双方向性」が重要なキーワードであることを踏まえ、参加型の授業として、受講生との議論や演習を重視したい。						

サブタイトル	No.	講義名	講義概要	講義日	教室	講師名	所属
科学コミュニケーションという思想	1	科学コミュニケーションとはなにか？	近年、「科学コミュニケーション」という概念が注目を浴びている。それは、従来型の科学技術に関する取り組みと、なにがどう違うのか。また、「科学コミュニケーション」とはそもそもどのような考え方なのか。科学コミュニケーションの基本的な考え方について紹介する。	4月14日	共通講義棟 1号館 204教室	中村征樹	文部科学省 科学技術政策研究所
	2	社会のなかの科学、社会のための科学	「科学コミュニケーション」という考え方が浮上ってきた背景には、科学と社会とをとりまく状況のグローバルな変化がある。戦後の科学技術政策の展開におけるその変遷について検討し、1999年に開催された世界科学会議で「社会のための科学」という概念が登場したことのもつ意味について考える。	4月14日			
	3	科学技術理解増進から科学コミュニケーションへ(1)	科学技術と社会との界面で生じている問題は、どのようなかたちで解決されるべきか。そのような課題へのアプローチは、この間、ドラスティックな変化を遂げてきた。問題の所在を、市民の科学技術に関する知識・理解の不足として把握する「科学技術理解増進」施策について、そのようなアプローチが登場してきた経緯やその具体的な取り組みも含めて検討する。	4月21日			
	4	科学技術理解増進から科学コミュニケーションへ(2)	1990年前後から英国を中心に科学技術理解増進施策をめぐる批判的な議論が登場し、1990年代末頃から、科学技術と市民との「対話」を重視する方向へと科学技術政策の動向が変化してきた。そのなかで、「科学コミュニケーション」というアプローチが浮上ってきた。その歴史的経緯と意義について議論する。	4月21日			
科学コミュニケーションの実践	5	科学技術情報の役割を考える——みのもんた現象を例に	あなたはメディアで流される食品・栄養情報などにどう対応していますか。専門家が生み出し社会に流されるさまざまな科学情報に私たちはどう向き合うべきか。それをワークショップ的に考えてみましょう。	5月12日		若松征男	東京電機大学
	6	科学技術活動への「市民」参加はありうる？	専門家や行政は表向きは広く市民の声を聞くべきだという態度をしめします。しかし、実際には、わけの分からない一般市民などの声や考えを政策に反映できないと考えているようです。それを皆さんで考えてみましょう。	5月12日			
	7	サイエンスショップとは何か	1970年代にオランダに生まれたサイエンスショップは、大学やNGOを拠点にして、市民の要望に応える科学研究や技術開発を行う組織であり、現在は欧州を中心に世界的に広がっている。その歴史と活動内容、運営方式について、欧州の例から紹介する。	5月19日		平川秀幸	大阪大学コミュニケーションデザインセンター
	8	サイエンスショップからみた知識基盤社会における大学の役割	現代社会は知識基盤社会とも呼ばれる。それは経済の面だけでなく、人々が自ら社会の問題を協力して解決し、住みやすいコミュニティを創造する政治的な営みにおいても、科学技術の知識が重要な役割を果たす社会である。そのような社会における大学の役割をサイエンスショップの働き観点から考察する。	5月19日			
	9	市民参加型調査とNPO	市民科学研究室の活動紹介を軸に、海外のサイエンスショップやCBR(community-based research)そして日本の様々な科学技術NPOの活動事例も紹介しながら、科学技術に関連する社会問題の解決においてNPOがいかなる役割を担っているかを概観し、市民・生活者の視点に立った問題解決のためのコミュニケーションがいかにあるべきかを考える。	5月26日		上田昌文	NPO法人 市民科学研究室
	10	リビングサイエンスの一手法としてのワークショップ	リビングサイエンスとは、生活を基点にした科学技術のとらえ直しと、それを手がかりにした様々な問題解決の実践であり、その実践には様々な形があり得るが、ここでは市民科学研究室が開発したワークショップ「携帯電話・政策論争」での「政策形成のための模擬討議」を体験することで、市民の問題意識を高める方法としてのコミュニケーションの形を探る。	5月26日			
	11	科学コミュニケーション—具体的な情報収集とイベント制作の裏側	現在、さまざまな場所で行われている科学コミュニケーション活動は、対象、規模、形態その他非常に多様です。氾濫する情報の中から、必要な情報を選び出し、また、得られた情報の中から、誰がどのようになぜ行っているのか、といった「裏側」を考える方法について、実践的な講義と演習を行う予定です。	6月2日		長神風二	独立行政法人 科学技術振興機構
	12	科学コミュニケーションの具体的実践—展示、映像、イベントの制作を通じて	科学コミュニケーションを具体的に実践するにあたり手法として取られる様々な態様(展示、映像、実験教室、トークイベント等)について、制作過程の具体例の紹介を交えながら、実践的な講義と演習を行います。	6月2日			
	13	サイエンスカフェとはなにか	1997年以降にフランス、イギリスではじまったサイエンスカフェは、その後、国際的にも大きな広がりをみせ、日本でも2004年以降、全国の大学や財団、NPOなどによって幅広く取り組まれるようになってきた。本講では、その具体的な概要を紹介する。	6月9日		中村征樹	文部科学省 科学技術政策研究所
	14	サイエンスカフェからみる科学コミュニケーション	サイエンスカフェは、従来の科学コミュニケーション活動と比べてどのようなメリットを持ち、また、科学技術と社会との関係をめぐっていかなる課題を提起しているのか。ワークショップ形式でサイエンスカフェの企画立案を行うことで、サイエンスカフェが可能にする科学コミュニケーションの可能性について検討する。	6月9日			
まとめ	15	科学技術と市民	ここまで学習したことを踏まえ、現代社会において科学技術と市民とのあいだのコミュニケーションはどのようなべきかについて議論する。	6月16日			